



第	12	回
---	----	---

稲むらの火・浜口梧陵

作家 童門冬二

浜口梧陵(はまぐち・ごりょう)は紀州(和歌山県)湯浅で、醤油業をいとなんでいた。関東地方にも支店を出し、銚子で生産される"ヤマサ醤油"は有名だ。千葉県と和歌山県とはやはり黒潮を通じて、海の接続線があったようだ。千葉県内にある勝浦とか白浜というのは、もともとは和歌山県の地名がそのまま千葉県に移ったものだろう。

浜口梧陵は、その関係でよく江戸にやってきた。江戸の知識人たちとも交流があった。開明的な学者である佐久間象山にも学んだ。象山から梧陵は"グローカリズム"を学んだ。象山は梧陵にこういった。

「きみは紀州人であると同時に日本人だ。さらに国際人でもある」

このいい方は梧陵を大いに触発した。かれは日本橋の本屋で知り合った勝麟太郎という青年武士のパトロンになる。勝が常に本屋の店頭立って、洋書を立ち読みしていたからである。その勉強熱心さに胸を打たれ、梧陵の勝庇護はその後もつづく。たとえば勝が幕府の高官になって神戸に海軍操練所(いまでいえば国立の海軍大学)をつくるときにも、多額の資金援助をしている。勝が、

「この学校は、日本国内のバラバラな海軍をひとつにまとめ、国防力を増すために人材を養成するものです」

と告げたので、その構想の大きさに感動し、惜しみなく金を出したのである。

しかし浜口梧陵の名が有名なのは、こういう開

明的な行為によってではない。むしろ和歌山県に大きな津波が押し寄せたとき、その襲来を村人に告げて高所に避難させた一事によってである。そして、この果敢な行為を最初にききこんだのが実は小泉八雲(こいずみ・やくも。ラフカディオ・ハーン)だった。八雲はこの話をきいて、

『リビング・ゴッド(生きている神様)』

という短編を書いた。たまたま、文部省が、「小学校の教科書に載せる美談」を募集した。和歌山県のある教師が、小泉八雲の『リビング・ゴッド』を読んで、これを改作した。それによると、

- ・紀州の湯浅に五兵衛という老人名主がいた
- ・この年は豊作で、村人は稲を田に積み上げ、祝の宴会を開いていた
- ・たまたま五兵衛が外に出て海をみた。そして思わずアッと声を上げた
- ・海から黒い山が押し寄せてきたからだ「津波だ！」

五兵衛は直感した。そこで慌てて家の中に駆けこみこのことを告げて、

「みんなに知らせて避難させよう」

といった。

- ・みんなは「どうやって知らせるんですか？」ときいた
- ・五兵衛は手に持った松明を掲げ、「これで稲に火をつける」といった
- ・みんなびっくりした。それは獲り入れたばかりの稲に火をつけるなどというのは、まった

く乱暴なことで、一年の苦労が全部ムダになってしまうからだ

- ・しかし五兵衛はそんな文句はきかずに、次々と稲むらに火をつけた
- ・これによって、村人たちも津波の襲来を知り、高所に避難してみんな助かった

というものである。つまり、

「村人の生命を助けるためには、収穫した稲の損失も恐れない」

という五兵衛の果敢な決断が村を救った、という話だ。

最近この話の研究者がいて、現地で古い人の話をきいたり、現場をみたりして、

「かなりフィクションが入っているのではないか」

という結論を出している。しかし五兵衛こと浜口梧陵は、この津波(安政元年)の直後に、地域に大がかりな堤防をつくっている。いまも残っているが、堤防は三段構えで、まず直接波を防ぐコンクリートの堤をつくり、間を空けてさらにもう一本堤防をつくっている。堤防と堤防の間に空いた場所には、たくさんの木を植えた。二重、三重に波を防こうという構造である。

また梧陵は地域の青年を集めて農兵隊をつくった。これは、

「津波を防ぐためだけでなく、津波のように外国軍が襲ってきたときの防衛軍だ」

と告げた。幕末は物騒な時代だ。天忠組という組織が、大和国(奈良県)の五条へ出かけて行って、代官を殺した。幕府は、紀州徳川家にも軍を出してこれを鎮圧するようにと命じた。紀州の隊長が梧陵のところにやってきて、

「農兵隊も応援してくれないか」と頼んだ。梧陵は首を横に振ってこういった。

「わたしの農兵隊は、日本人同士殺し合うためにつくったものではありません。お断りします」

その点、筋を通しガンコな人物だった。政治にもかかわりを持ち、一時は大蔵省の幹部にもなったが、やはり組織には向かなかったようだ。とくにかれは、

「和歌山県の地方主権」

を守り抜いたから、中央政治と地方政治という関係では、しばしば考えを異にしたようだ。

三月十一日の"東日本の大震災"以来、また"稲むらの火"に光が当てられはじめている。浜口梧陵の精神は単に、

「村人を高所に避難させるためにせっかく獲り入れたばかりの稲に火をつけた」

ということだけではない。佐久間象山に学んだグローカリズムや、あるいは三重の堤防をつくる地域愛などにも眼を向けなければ、本当の梧陵像というのは理解できない。つまりかれの精神の根底には、

「世界を愛し、日本を愛し、地域を愛する」

という三重の"他人を思うやさしい心"が存在していたのである。